

は し が き

1980年代の教育は、「学問中心から人間中心の教育課程」と言われているように教育理念の転換期に当たります。しかし、ムード的とらえ方でなく豊かな「人間性の育成」「ゆとりと充実」を実際の学校現場で見直し、どう展開したら理念の具現化になるか絶えず生きた生徒を頭に描きながら取り組まねばならないでしょう。そうでないと、教室の入口までは改革の意識が大きくともいったん教室の中に入ると今までと全然変わらない結果になる恐れがあります。

このような観点に立つと、新しい教育課程の精神が日々の授業展開に反映され、その上一人ひとりの児童・生徒の学習成立を可能にするきめ細かい指導が要請されるはずです。その際、児童・生徒の実態は握と教材の構造化・精選化に基づく学習指導をめざしての教師の力量が大きく物を言うことになると思われます。当県立教育センターが、日夜努力しながらまい進している先生方に少しでも役に立てていただければと願って学校教育の課題を踏まえた主題をとりあげて研究している理由の一つもそこにあると言えるでしょう。

英語教育に目を転じてみると、昭和56年度からの英語授業時数削減に関する問題が教師間だけでなく父兄間にもとりあげられ、社会的関心事にすらなっています。時間数が少なくなると授業と授業の間隔が大きくあき基礎学力の定着によくないのではないかと、語学訓練に不可欠な反復練習も減るのでないかという危ぐが聞かれます。このような厳しい英語教育の環境にもかかわらず、新教育課程が実施されている現在、表面的現象にばかりとらわれて論じてもますます混乱するばかりですから、より建設的方向で努力すべきでしょう。例えば、教師の適切な援助による生徒の英語に対する興味喚起と学習方法の確立、教材構成上の配慮による英語の基礎・基本の体系的知識などが、こん後大切になります。

この研究報告は、今まで述べたような教育の潮流、英語界の動きに呼応させながらまとめたものです。なかんずく、認知論に基づく指導法、教材分析が、これからの授業の質的転換になるのではないかと考えその面を特に強く出してあります。

最後に、まだ研究の進め方や内容に不備な点があると思いますので、率直な御批判、御指導をたまわれれば幸いと考えています。

昭和56年3月

新潟県立教育センター所長 風 巻 友 重